



金斗喆

はじめに

①加耶の馬具

②倭の馬具

③馬具と編年問題

おわりに



加耶は、大略的に5世紀中葉を境界にして前期と後期にわけられる。前期加耶は、4世紀代から5世紀前半にかけての間に、洛東江下流域の金海と釜山が中心となって繁栄した。この時期は、中国東北地方の鮮卑族及び北方民族の馬匹文化を受容して、以前の三韓時期とは著しく異なる一人騎乗の馬匹文化を発展させた。後期加耶は、5世紀後半から562年まで、洛東江西岸を中心に様々な勢力が割拠した。その代表的勢力の一つが、高靈を中心とした大加耶である。高靈と多羅國の故地であった陝川地域は、内彎構円形板轡・f字形板轡・剣菱形杏葉などの独特な馬具を発展させ、洛東江東岸の新羅とは地域的な対照をみせる。

日本では、5世紀になって大陸、とくに加耶を通して、金属製馬具を受容する。当時、加耶と日本は、それだけ密接な関係にあった。前期加耶を通して受容した馬具はそれほど数量が多くなく、列島の各地で個別的に受容していた可能性が高い。反面、後期加耶を通じた馬具の受容は日本の中央政府によって武冠制の確立のため選択的におこなわれ、ただちに国産化された可能性が高い。

このように、前・後期加耶と日本の間の密接な交流関係は、逆に馬具を通じて両地域の編年を調整できる可能性が開けてくる。このような観点から、日本の古墳時代の暦年代の設定において重要な基準になっている埼玉県稻荷山古墳の礫椁の年代を探究すると、6世紀の第1四半期の後半に求めるのが妥当であろう。